

記号「藤原道真」の生成プロセス：歴史的確執、伝承の変容、および認知的干渉に関する学術的考察

序説：非在の語彙「藤原道真」という歴史的混同

菅原道真は、平安時代を代表する学者であり、宇多天皇および醍醐天皇の絶対的な信任のもとに右大臣にまで登り詰めた実在の政治家である¹。彼は政敵との政争の末に大宰府へ左遷され、非業の死を遂げた後、怨霊としての恐怖を経て「天神(学問の神様)」へと神格化された²。この歴史的事実にもかかわらず、現代のメディア、観光ガイド、あるいはインターネット上の言説において、彼を「藤原道真(ふじわらのみちざね)」と誤って表記・呼称する事例が後を絶たない⁴。

この「藤原道真」という、歴史上存在しないはずのハイブリッドな単語がなぜ生まれたのか。この問いを深掘りすると、単なる個人の記憶違いを超えた、幾重にも重なる歴史的・文化的・認知的ダイナミクスが浮かび上がってくる。本報告書では、古代から現代に至る言説の変遷を辿り、この誤認が生成・定着した背景を多角的に分析する。

歴史的文脈における対立構造とナラティブの表裏一体性

「藤原道真」という単語が生まれる最大の歴史的要因は、道真の政治的キャリアとその失脚、さらにはその後の神格化に至るすべてのナラティブが、常に「藤原氏」という巨大な権力主体との強固な対立構造の中で語られてきたことにある⁴。

菅原氏は、天穗日命を祖とする古代の「土師(はじ)」氏を起源とし、781年に地名にちなんで「菅原」姓に改称した学者貴族の家系である³。代々文章博士を輩出する儒学・実務官僚の家系であったが、婚姻関係を通じて外戚政治を確立しつつあった藤原北家とは、政治的支配の論理において本質的なズレが存在していた³。この「知の権威」と「血縁・門閥の権威」の対立が、やがて朝廷内の深刻な確執へと発展する³。

この確執の萌芽は、道真が中央政界で台頭する契機となった「阿衡事件(阿衡の紛議)」にまで遡る¹²。宇多天皇が発した勅書の中にあつた「阿衡」という文言をめぐる、関白・藤原基経が職務を放棄したこの事件において、起草者である橘広相は、道真の父である菅原是善の門下であった¹²。この時、讃岐守の任地にあつた道真が基経に宛てて送った書状が事態の収拾に寄与したが、これは同時に、道真が藤原氏という存在を強く意識し、また藤原氏側からも警戒される対立の始まりでもあつた¹²。

やがて発生した「昌泰の変」(901年)は、左大臣・藤原時平の讒言(道真が齊世親王を擁立して皇位継承を企てているという虚偽の告げ口)により、醍醐天皇が道真を大宰府へと追放した事件である⁴。この時、道真の子供たちや右近衛中将源善らも連座して流罪に処された¹⁴。

道真が大宰府で無念の死を遂げた後、京都では道真を左遷に追いやつた藤原時平が39歳の若さで病死したのを皮切りに、皇太子・保明親王の夭折、さらには御所清涼殿への落雷による貴族たちの焼死と、醍醐天皇の崩御が相次いだ⁵。人々はこれを「道真の祟り」と恐れ、元の地主神である火雷神と道真を関連付け、その怨霊を鎮めるために北野天満宮を建立して神として祀り上げた⁶。

歴史的フェーズ	出来事と「藤原氏」との関わり	認知的帰結
確執の萌芽	阿衡事件(887年):菅原是善の門下である橘広相が起草した勅書をめぐり藤原基経が抗議 ¹²	菅原氏と藤原氏の対立構図が朝廷内に定着 ¹²
失脚(昌泰の変)	昌泰の変(901年):藤原時平の讒言により菅原道真が大宰府へ左遷 ⁴	「道真」と「藤原(時平)」が歴史の対決軸として一対化 ²
怨霊と神格化	相次ぐ変死・災害。時平を含む藤原氏一族や皇族が次々と死を遂げる ⁵	「藤原氏を滅ぼす怨霊としての道真」という強烈な物語の生成 ⁶

このように、菅原道真のナラティブは、その誕生から死、そして神格化に至るまで、「藤原氏(基経、時平、そして怨霊を恐れる後継の藤原氏一族)」という他者と表裏一体のものとして語られ続けてきた²。この歴史的語りの構造が、後世の人々の脳内において「道真」と「藤原」という言葉を極めて強固に結合させ、主体の「菅原」を「藤原」へと変質させる基礎的な土壌となった⁴。

文献学・伝承学からみる混同の深層:天神縁起における「藤原是善」

「藤原道真」という混同の起源は、現代のインターネット上での誤記や一般大衆の無知にのみ帰せられるものではない。文献学および説話文学の観点から歴史を遡ると、すでに中世以前の伝承形成の段階において、道真の家系を「藤原」に結びつけようとする言説の混乱が存在していたことが明らかになる。

天神信仰の広がりとともに成立した種々の『天神縁起』や説話の中には、伊勢神宮の神官・渡会春彦の夢に関する伝承が遺されている¹⁸。その記述によれば、春彦は道真がこの世に誕生する以前、高天原を遊ぶ夢の中で、西方浄土救世菩薩の化現である童子に出会ったとされる¹⁸。童子は自らが人間に転生することを告げ、その際「藤原是善公の子に生まれる」と宣言したという¹⁸。

実際の道真の父親は、学者貴族である「菅原是善(すがわらのこれよし)」である。それにもかかわらず、写本の継承や口頭伝承の過程において、すでに「藤原是善」という表記が出現していた事実は極めて重要である¹⁸。

この混同が生じた背景には、道真を「神の化身」として極限まで美化・神格化しようとする中世の語り手たちの意図が関係していると推察される。当時、最高権力と社会的栄華を誇っていた「藤原氏」の血統に道真を結びつけることは、実務貴族に過ぎない「菅原氏」の出自のまま語るよりも、その神聖性や格式を補強する上で、説話的に都合が良かった可能性がある。あるいは、単に伝承の記録者が「名門貴族の是善」を自動的に「藤原是善」と脳内で処理した結果とも考えられる。いずれにせよ、道真が生まれる前の神話的起源の記述において、すでに父の代から「藤原」への改変・汚染が始まっていたことは、この単語の誕生が文献学的に非常に根深い歴史を持っていることを証明している。

認知心理学的分析:スキーマの同化作用と言語的ブレンドエラー

なぜ「菅原道真」が「藤原道真」に置き換わるのかというメカニズムは、認知心理学における「スキーマ(知識構造)」の同化作用と言語的な干渉モデルによって極めて明確に説明される。

第一に、日本の歴史教育において、平安時代は「藤原氏の時代(摂関政治)」として極めて単純化され、学習者の脳内に強力なスキーマとして固定される。学習者の多くは、「平安時代の最高権力者・大貴族＝藤原氏」というカテゴリー分類(スキーマ)をデフォルトとして所持している。そのため、右大臣という朝廷の最高幹部にまで登り詰めた「道真」を想起する際、脳内のスキーマが自動的に適用され、本来の「菅原」という比較的マイナーな氏が、支配的な「藤原」へと同化(Assimilation)させられてしまう。

第二に、この認知的エラーを決定づけるのが、平安時代中期に摂関政治の全盛期を築いた「藤原道長(ふじわらのみちなが)」との記号的・音韻的な極めて高い類似性である。この二者の名前は、脳のワーキングメモリにおける情報検索の過程で、以下の表に示すような構造的干渉を引き起こす。

構成要素	菅原道真(正しい対象)	藤原道長(干渉源)	生成される誤謬(藤原道真)
氏(姓)	菅原(す・が・わ・ら) 4	藤原(ふ・じ・わ・ら)	藤原(ふ・じ・わ・ら) (道長から干渉)
名(名)	道真(みち・ざ・ね) ⁴	道長(みち・な・が)	道真(みち・ざ・ね) (道真から保持)
音節数	8音(す・が・わ・ら・の・み・ち・ざ・ね)	8音(ふ・じ・わ・ら・の・み・ち・な・が)	8音(ふ・じ・わ・ら・の・み・ち・ざ・ね)
視覚パターン	「○原道○」(末尾が漢字一文字)	「○原道○」(末尾が漢字一文字)	「○原道○」(末尾が漢字一文字)

言語心理学における「ブレンド誤り(Blending Error)」に基づけば、記憶から「平安時代の高名な歴史的人物」を検索・出力する際、最も活性化レベルの高い「藤原」という姓(道長、時平、基経などの記憶から結合された高頻度語)が選択され、一方で想起しようとする人物のアイデンティティである「道真」という名がそのまま結合される。視覚的にも音韻的にも両者は「○原道○(○○わらのみち○○)」という同一のゲシュタルト(形態)を共有しているため、脳の監視機構は「藤原道真」という架空の組み合わせを出力した際にも違和感を検知しにくく、そのまま正しい知識として出力してしまうのである。

さらに、現代における認知的混乱の深刻さを示す事例として、インターネット上の記述において、一度「藤原道真」と書いた著者が、不完全な知識修正を試みた結果、「藤原菅原道真」という二重の氏を持つキメラ的な呼称を造り出してしまった例も報告されている¹¹。これは、「藤原」と「菅原」の双方が道真のナラティブと不可分に結びついているために、どちらを排除すべきか判断がつかなくなっ

た、認知的膠着状態の極端な現れであると言える。

現代情報空間におけるシステムの増幅と誤認識の自己増殖

「藤原道真」というエラーワードが、一部の個人の脳内から社会的な「標準語彙」へと浮上・定着したプロセスには、現代のデジタル情報空間における「システムの増幅機能」が大きく関与している。現在、ウェブメディア、個人の旅行ブログ、さらには一部の観光・文化紹介ウェブサイトにおいて、「藤原道真公」を祀る天満宮といった記述や、道真の「梅」に対する愛情や「飛梅伝説」を解説する中で「藤原道真」と表記するエラーが頻発している⁸。これらは、ライター執筆時の認知エラーが、十分な校正プロセスを経ずにインターネット上に公開されてしまった結果である⁸。

一度ウェブ上に放たれた「藤原道真」という誤表記のテキストデータは、以下のようなデジタル技術の負のフィードバック・ループを通じて増幅される。

1. 検索エンジンのサジェスト汚染:

不特定のユーザーが記憶の混同から「藤原道真」と検索し、またウェブ上にその誤表記を含むページが多数存在することにより、検索エンジンは「藤原道真」を関連性の高い語彙としてデータベースにインデックスする。結果として、検索候補に「藤原道真」が自動提示されるようになり、それを見た別のユーザーが「藤原道真」という呼称が正しい」と誤学習する。

2. 予測変換とアルゴリズムの自動学習:

ユーザーがスマートフォンやPCで「みちざね」と入力した際、過去のネット上の大量のテキストから学習したインプットシステムが、頻出度の高い「藤原」と結合させて「藤原道真」を予測変換の候補に推薦する。これにより、執筆者は疑念を抱くことなくその変換を選択し、さらなる誤表記テキストが大量に再生産される。

3. 人工知能(生成AI)によるデジタルトラップ:

ネット上の公開データをソースとして学習する大規模言語モデル(LLM)などのAIシステムが、蓄積された「藤原道真」という誤表記の多さに影響され、ユーザーのクエリに対して「藤原道真は平安時代の...」と尤もらしい嘘(ハルシネーション)を出力する。

このように、人間の脳のバグ(認知的混同)から発生した小さなエラーが、インターネットのプラットフォーム、検索アルゴリズム、そして生成AIというフィルターを通じてデジタル空間全体に均一化・標準化され、今や強固な「擬似歴史的事実」として社会に定着しつつあるのである。

総括: 必然の誤謬としての「藤原道真」

「藤原道真」という言葉の誕生と拡散は、一見すると単なる現代人の教養不足や怠慢がもたらした「イージーな書き間違い」に過ぎないように見える。しかし、その生成プロセスを深掘りすると、そこには歴史のダイナミズムと言語の特性が織りなす必然的な構造が存在している。

古代における土師氏から菅原氏への改姓の歴史に始まり¹¹、阿衡事件や昌泰の変における藤原氏との生涯にわたる政治的対立¹²、さらには時平をはじめとする藤原氏一族の怪死を伴う怨霊・天神信仰への昇華⁵に至るまで、道真は「藤原」という最大のライバルを映す鏡として語り継がれてきた。この宿命的なナラティブの構造が、中世の説話(天神縁起)における「藤原是善」のような家系の混同を生み¹⁸、後世における「藤原道長」との認知的ブレンドエラーを引き起こす強力な下地を形成した。

本来、藤原氏が確立しようとした外戚政治と家門政治の厚い壁に対し、自らの類稀なる「学問の実力」のみで立ち向かった菅原道真が²、後世において自らを追放した政敵の姓である「藤原」を冠して呼ばれている事態は、極めて不条理であり、歴史のアイロニーと言わざるを得ない。この現象は、歴史的な記憶というものが、いかに言葉の音韻、認知の枠組み(スキーマ)、そしてそれらを増幅する

情報システムの物理的性質によって容易に変容し、再構築されてしまうかを示す、極めて示唆に富む文化的症例なのである。

引用文献

1. ほぼ日刊イトイ新聞-神様をさがしに。～京都の巻～, 5月 20, 2026にアクセス、<https://www.1101.com/kamisama/2012-02-03.html>
2. 漢字vsひらがな(菅原道真&藤原時平の物語)|佐賀県佐賀市学習塾 ホクト進学塾, 5月 20, 2026にアクセス、<https://hokuto-juku.com/archives/14372.html>
3. 菅原道真はなぜ消された?藤原家VS天皇家「権力闘争」に敗れた天才の末路 - note, 5月 20, 2026にアクセス、https://note.com/rekishi_dana/n/n1cfbfaddf794
4. 大阪天満宮の菅原道真について - スタジオアージュ, 5月 20, 2026にアクセス、<https://studio-age.com/Sugawara-no-Michizane/>
5. ハメられたら「神対応」でリベンジ! 怨霊になった菅原道真“実家跡”のメッセージ|コラム 京都「人生がラク」になるイイ話|PR会社 - TMオフィス, 5月 20, 2026にアクセス、<https://www.tm-office.co.jp/column/20151109.html>
6. 【受験生必読!】北野天満宮の祭神・菅原道真の皮肉な人生とは? - Kyoto Love. Kyoto 伝えたい京都, 5月 20, 2026にアクセス、<https://kyotolove.kyoto/I0000144/>
7. 展覧会『ラストクロニクル』/召喚英雄考察 - 第6弾黒青構他 - 旧世紀網膜博物館, 5月 20, 2026にアクセス、<https://burikino.blogspot.com/2015/03/6.html>
8. 東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花 - クリエイターズステーション, 5月 20, 2026にアクセス、<https://www.creators-station.jp/report/creators-eye/155594>
9. 大阪天満宮 | おとな旅あるき旅 | TVO テレビ大阪, 5月 20, 2026にアクセス、https://www.tv-osaka.co.jp/ip4/tabii_smp/onair/spot_otona/2126777_9801.html
10. 【大宰府天満宮の魅力・見どころ12選】6000本の梅の花・梅が枝餅・梅干し・学問の神様/藤原道真公, 5月 20, 2026にアクセス、<https://umeboshi-umeko.com/2022/11/06/dazaifu/>
11. 菅原道真は土師氏「道明寺/道明寺天満宮」日本で7体のレア国宝【南河内シリーズ】【大阪ミナミシリーズ】 - note, 5月 20, 2026にアクセス、https://note.com/yanma_travel/n/n82d8ea52b2ad
12. 阿衡事件 日本史辞典／ホームメイト - 刀剣ワールド, 5月 20, 2026にアクセス、<https://www.touken-world.jp/history/history-important-word/ako-jiken/>
13. 太宰府天満宮 | 平安時代の文人貴族、菅原道真が“学問の神様”になるまで - 史跡ナビ, 5月 20, 2026にアクセス、<https://shisekinavi.com/dazaifutenmangu/>
14. 昌泰の変 - Wikipedia, 5月 20, 2026にアクセス、<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%8C%E6%B3%B0%E3%81%AE%E5%A4%89>
15. 昌泰の変 日本史辞典／ホームメイト - 刀剣ワールド, 5月 20, 2026にアクセス、<https://www.touken-world.jp/history/history-important-word/syotai-no-hen/>
16. 菅原道真は何をした人? 学問の神様と呼ばれる理由や梅の花との関係 - ワンダースクール, 5月 20, 2026にアクセス、<https://thewonder.it/article/1090/description/>
17. 学問の神で知られる菅原道真は崇りをなした怨霊だった - ノジュール, 5月 20, 2026にアクセス、<https://nodule.jp/info/ex20210803/>
18. 菅丞相の徳、松の徳 [『菅家瑞応録』と『菅原伝授手習鑑』] | ふじちょうのヨモ - note, 5月 20, 2026にアクセス、https://note.com/fujicho_no_yomo/n/n236d0b38cdf5